

## 論文内容の要旨

氏名	山中 彰一郎
The Comparison of Three Predictive Indexes to Discriminate Malignant Ovarian Tumors from Benign Ovarian Endometrioma: The Characteristics and Efficacy	
(和訳)	
卵巣悪性腫瘍と良性内膜症性嚢胞の鑑別における各予測インデックスの特徴と有用性の比較	

### 論文内容の要旨

卵巣子宮内膜症性嚢胞：ovarian endometrioma (OE)は卵巣に子宮内膜腺と間質が存在する病態である。卵巣において月経様の出血を毎回繰り返すため、血液の慢性的な貯留による鉄過剰状態となる。鉄過剰状態は中皮腫、腎細胞癌、肝細胞癌などの悪性腫瘍と疫学的な関連があり、卵巣子宮内膜症性嚢胞も例外ではない。それらは、内膜症関連卵巣癌：Endometriosis-Associated Ovarian Cancer (EAOC)と呼ばれる。OE と EAOC は連続する病態と考えられているものの、その治療方針は全く異なるため、特に妊孕性を有する閉経前患者にとって、正確な術前診断を行なうことは極めて重要である。

OE と EAOC を鑑別する指標として、Copenhagen Index (CPH-I) , the risk of ovarian malignancy algorithm (ROMA) 、R2 predictive index が知られている。その内、R2 predictive index は当学産婦人科学教室から提唱されたものである。本研究はそれらの有用性を詳細に比較検討し、特徴を明らかにすることでより効果的な適用方法を探索することを目的とした。

2008年1月から2021年7月まで、奈良県立医科大学附属病院婦人科で治療を受けたOEとEAOC患者171例を対象とし、カルテ上の情報から後方視的検討を行なった。OEの患者は主に腹腔鏡手術を受け、EAOCが疑われる患者は開腹手術を受けていた。今回の研究では、症例を閉経前、閉経後、および両者を併せた全期間の3つの群に分けて検討した。

全期間では、多変量解析により、ROMA (ハザード比[HR]: 222.14、95%信頼区間[95%CI]: 22.27-2215.50、p値: 0.001)、R2 predictive index (HR: 9.80、95%CI: 2.90-33.13、p値: 0.001)、片側性であること (HR: 0.15、95%CI: 0.03-0.75、p値: 0.021) がEAOCを予測する独立因子として抽出された。閉経前群では、CPH-I (HR: 6.45、95%CI: 1.47-28.22、p値: 0.013) と R2 predictive index (HR: 31.19、95%CI: 8.48-114.74、p値: 0.001 未満) が EAOC を予測する独立予測因子として抽出された。さらに、R2 predictive index は全期間においてのみ、境界悪性腫瘍を予測する独立した因子として抽出された (HR: 45.00、95%CI: 7.43-272.52、p値: 0.001 未満)。以上により、閉経前では R2 predictive index が有用であり、閉経後では ROMA が他の指数よりも優れている。更に境界悪性を予測する場合には R2 predictive index が最も有用性が高いことを示した。